

「新しい地域研究」の一〇年へ

——総特集「地域研究方法論」を読んで

末近浩太

帰ってきた地域研究方法論

待望の書である。これが評者の最初の感想である。地域研究方法論一般を論じた研究書は、立本成文（一九九九）や高谷好一（二〇〇一）らによる著作、坪内良博編（一九九九）や加藤普章編（二〇〇〇）などが立て続けに刊行された一九九〇年代末から二〇〇〇年代初頭以来、長らく出されてこなかったからである。

この十余年のあいだには、日本における地域研究をとりまく環境も大きく変わった。地域研究を打ち出す学部・大学院がいくつも開設され、二〇〇四年には「地域研究コンソーシアム」が誕生した。また、地域研究分野の公的研究資金も拡大され、二〇〇六年には日本学術会議の分野別委

員会の一つとして「地域研究委員会」が設置された。総じて見れば、教育・研究の現場で地域研究に関わる人びとは増えた。そして、東アジア、東南アジア、南アジア、中東、ユーラシア、アフリカ、ラテンアメリカ等、各地域の名を冠した地域研究の書物やプロジェクトが生まれた。

しかしながら、こうした地域研究の制度化や「盛り上がり」に比べると、地域研究の意義や可能性、方法論一般について真正面から取り組む試みは、（おそらく右記の「地域研究委員会」をのぞけば）皆無であった。ゆえに、「総特集」としてまるまる一冊を「地域研究方法論」に割いた本書は、待望の書なのである。

とはいえ、読後にある種の既視感を持ったことも告白せねばならない。その既視感を自分なりに言葉にしてみる、それは「つかみどころのなさ」と「熱さ」に集約でき

新しい地域研究方法論

る。すなわち、地域研究が相変わらず発展途上にあり、それゆえにその方法的探求の必要性和社会的意義や可能性を積極的に語らねばならない、という論調である。こうした論調は、十余年前の立本や高谷らの著作にも共通し、さらにその約一〇年前に出された矢野暢（一九八七）の論考にも同じような印象を抱いたように記憶している。この点は、本特集において油井大三郎氏が「地域研究とは何か」という問いをめぐる議論が「堂どうめぐり」（六七頁）を

続けていると感想しているのと通底するのかもしれない。むろん、仮にそうだとしても、それは本特集の価値を損ねるものではない。むしろ、そうした地域研究が抱えてきた困難を積極的に引き受けようとする姿勢こそが本特集の醍醐味であり、編集責任者であり長年にわたって「地域研究方法論研究会」を組織してきた山本博之氏の意図であるように思われる。そもそも既視感ということは、地域研究の方法論をめぐる諸課題が手つかずのままであることなのである。その意味では、本特集の面白さは、地域研究の方法論一般をめぐる停滞ないしは「地域別分業化」が進むなかで、今一度「地域研究とは何か」という問いに真正面から向き合い、今の時代に相応しい地域研究の意義と可能性をめぐる議論を再活性化させようとする、いわば問題提起の姿勢にあるのではないだろうか。

しい地域研究」を実際にかたちにしていくためには、何らかの道筋を示す必要がある。一〇年前、二〇年前の地域研究方法論がどちらかといえば理念や思想を（時に過剰にまでに）打ち出すことを重視していたとすれば、本特集の画期性はそれらに加えて具体的な研究の道筋を示そうとした点にあるだろう。

それを象徴するのが、総論に続く「現場の悩み三〇問」である。これは「地域研究方法論研究会」での議論を元にテキストを起こしたものであるが、地域研究を志す大学院生や若手研究者（あるいはベテランも）が抱きがちな不安や疑問に対して、一問一答（あるいは二答、三答）で解説していくものとなっている。地域研究をどのように修得し（学び方の問題）、どのように評価され（学説史の問題）、どのようにキャリアパス（所属学会や就職の問題）を設計するのかという極めて実践的な問いと答えが網羅されており、まさしく「地域研究方法論」のタイトルに相応しい内容となっている。

第Ⅱ部は「地域研究の牽引者たちからのメッセージ」と題され、さまざまな地域を専門にする総勢一六名のシニア研究者が第Ⅰ部の内容への応答文を寄せ、それぞれの地域への思いと自分史について語るものとなっている。「書評の書評」となってしまうために個別の内容には詳しく立ち入らないが、やはりというべきか、総じて見れば、第Ⅰ部

本特集は三部構成となっている。順番に見ていこう。

第Ⅰ部「大学院で学ぶ／教える地域研究」は、山本氏による「新しい地域研究」についての総論に始まる。「個性に埋没」するだけの「古い地域研究」に対して、「新しい地域研究」は「デイシプリンを内側から改良・改造しようとする試み」や地域の固有性を「他地域との相関性において理解する語り方」が特徴であるという。だが、評者（がメインフィールドとする中東政治研究）の印象では、ほとんどの地域研究者はこれらの意識を何らかのかたちで共有しているように思われる。それよりも評者が山本氏の「新しい地域研究」に「新しさ」を感じたのは、従来の知の枠組みでは問題関心や分析対象からこぼれ落ちてしまいう「想定外」の出来事に対して、地域研究が「伝統的な学問分野の理論と地域（現場）を合わせた形で研究」（二四頁）することができると柔軟さを持っている、との主張である。それは、「アラブの春」や東日本大震災のような「想定外」の出来事が起こった今の時代における地域研究の意義と可能性、そしてそれに関わる地域研究者の役割を提示しようとするものでもある。

だが、言うは易く行は難し、である。このような「新」の「熱い」議論への応答としては内容的に濃淡があり、結果的には地域研究の「つかみどころのなさ」が浮き彫りになっている。だが、少なくとも現時点において地域研究がデイサイプル（弟子）に対して体系的に知の伝授を行うデイシプリンとなっていないことを考えれば、こうしたオムニバス形式を通して「背中を見て学ぶ」きっかけを提供することは大いに意味がある。さまざまな地域研究者の研究人生における歩みや悩みに触れることで、大学院生や若手研究者は勇気づけられるだろう。

ちなみに、評者も二〇一二年から所属先の大学学部で新設科目の「地域研究論」を担当することとなったが、一年を通してたどり着いたのは、地域研究の意義や可能性を学生に伝えようとするとき、地域研究者の語りを通してその生き様や「作品」に触れ、感じてもらうのが実は一番早道ではないかという暫定的な結論である。

それにしても、地域研究も地域研究者も多様である。月並みではあるが、これが第Ⅲ部「新しい地域研究をめざして」に対するコメントである。それは単に研究対象地域が多様であるというだけではなく、文系と理系、問題設定、方法論、そして地域とのつき合い方など、寄稿者のあいだでばらばらである。しかし、あえてそこに共通するものを見出すならば、それはそれぞれの地域研究者が専門とする地域を足場とした、普遍性への眼差しと苦悩である。地域

の専門家であることや「地域の知」の重要性に揺るぎない自信をにじませながらも、何とかそこからディシプリンの発展や現実社会の問題の解決に向き合おうとする姿勢は、右に述べた山本氏による「新しい地域研究」の理念と通底するものである。その意味では、「新しい地域研究」はすでに萌芽を終え、その花を咲かせつつあるのかもしれない。

「自虐史観」を超えて

今日のアカデミアにおいて、地域研究の存在意義を否定する者は少数派であろう。だがその一方で、地域研究の存在意義を真正面から語る者もまた少数派である。地域研究者のあいだでも、個別性に埋没するだけの「古い地域研究」への批判は耳にすることはあっても、「新しい地域研究」ないしは地域研究のあるべき姿を語る声はほとんど聞こえてこない。こうした状況は、地域研究者の数が減っていることを意味するものではなく、むしろその数が増えているにもかかわらず、自らが第一義的に地域研究者であると名乗ることどころか引け目（本特集の言葉を借りれば「自信のなさ」〔六〇頁〕）を感じていることに原因があるのではないだろうか。ディシプリンへの理解や知見を示し、返す刀で地域研究の弱点を批判するだけの「自虐的な」地域研究者（もどき）ばかりが増えているとしたら、それは地域研

究だけではなくディシプリンの発展にとっても不幸なことであろう。

本特集を読んでも、体系化・定式化された地域研究の方法論を知ることができない。また、地域研究の意義と可能性への「熱い」語り思わず「引いてしまふ」読者もいるだろう（実際にそういう声は耳にした）。しかし、真正面から地域研究を語らなければ、地域研究が「つかみどころのなさ」を拭い去り、地域研究者が胸を張って自分の研究を「地域研究である」と言える日も来ない。その意味において、「新しい地域研究」についての問題提起と具体的な道筋の提示を試みた本特集の功績は大きい。次の一〇年は、それぞれの地域研究者次第である、自戒の念を込めて。

●参考文献

- 加藤普章編（二〇〇〇）『新版 エリア・スタディ入門——地域研究の学び方』昭和堂。
- 高谷好一（二〇〇二）『新編「世界単位」から世界を見る——地域研究の視座』京都大学学術出版会。
- 立本成文（一九九九）『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学（増補改訂）』京都大学学術出版会。
- 坪内良博編（一九九九）『総合的地域研究』を求めて——東南アジア像を手がかりに』京都大学学術出版会。
- 矢野暢（一九八七）『地域研究と政治学』矢野暢編『講座政治学Ⅳ 地域研究』三嶺書房。

●著者紹介

- ①氏名……末近浩太（すえちか・こうた）。
- ②所属・職名……立命館大学国際関係学部・准教授。
- ③生年・出身地……一九七三年、愛知県。
- ④専門分野・地域……中東地域研究、国際政治学、比較政治学、特にシリアとレバノン。
- ⑤学歴……横浜市立大学文学部（人文課程西洋史専攻）、英国ダーラム大学中東・イスラーム研究センター（CMETS）・修士課程（修士・中東政治学）、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・五年一貫制博士課程（博士・地域研究）。
- ⑥職歴……日本学術振興会特別研究員PD（三〇歳、二年間）、立命館大学国際関係学部准教授（三二歳）。
- ⑦現地滞在経験……シリア（海外調査・語学留学、二七歳、一年間）。
- ⑧研究方法……現地語原典を読む、現地に行く、ディシプリンを学ぶ、が三本柱。現地では「当たり前」であるが、観察者にとってはそうではない「暗黙知」を拾い上げ、その面白さや学問的な意義をできるだけ多くの人がわかることばと論理で表現すること。
- ⑨所属学会……日本中東学会、日本国際政治学会、日本比較政治学会、日本イスラーム協会。
- ⑩研究上の画期……学部学生ときにレバノンで某イスラーム主義組織に拘束されたとき。彼ら彼女らの「生」に触れることで、それまでの固定観念や謎が一気に解けた。
- ⑪推薦図書……小杉泰『イスラーム世界論』（名古屋大学出版会、二〇〇六年）。